学長室から
MESSAGE

本学の英語教育活動について

小学校で2020年度から全面実施される、「外国語活動」と「外国語」については、前号の題目〝新学習指導要領「外国語活動」への期待〟で書かせていただきました。ちょうど先日、文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課教科調査官の直山木綿子氏の講演を聞く機会がありました。平成30（2018）年度と31年度の移行期における授業がいかに重要であるか、中学校に進学した後にまで影響が及ぶことを力説した素晴らしい内容でした。一方、今後小学校における「外国語活動」と「外国語」がうまく機能すれば、その世代の子どもたちが大学に入学する頃には、ずいぶん学生気質も変わっているだろうと期待できます。多くの卒業生が小学校教員となる本学の学部学生にも、要求される「外国語活動」と「外国語」の授業力をもっと実感して欲しいものです。既に、数年前から小学校教員採用試験では、英語資格に対する加点措置等を行う教育委員会が増えています。本学の場合、学生にどれだけ英語学習を課すかは、学生の将来を左右する問題ともいえます。しかし、英語に限らず語学は「慣れ」以外に上達の道はありません。そうであるなら、カリキュラムや課外学習にどれだけ英語を盛り込めるかが焦点になってきます。今回は、本学が実際に行っている様々な英語教育活動を紹介します。

最近、台湾で行われたある会議で、東南アジア、特にタイの大学学長10名以上が参加する会がありました。多少の上手下手はあっても言葉は全員英語でした。また、昨年11月に参加したカンボジアの国立8大学の学長が集まった会議では、スピーチは全員英語でした。かなり上手な学長も多く、10年以上前には考えられないことです。おかげで東南アジアの大学学長と十分話をすることができました。もはや英語は若い世代の話題だけではありません。ビジネスはもちろん、アカデミックな世界でも、相互理解のためにシニア世代でも英語ができないとコミュニケーションが成り立たないのです。AI翻訳機を持ち歩くようになれば、英語力など関係ないという人もいるかもしれませんが、外国の方たちと一緒に食事をする時や、観光するのに翻訳機を見ながら行うというのは実際的ではありません。

母語以外で会話するというのは実にエキサイティングな経験です。その楽しさや喜びを多くの人が味わえば、社会の雰囲気も変わるのではないでしょうか。

学長 福田光完（ふくだ みつひろ）